

地域の多様性を大切に、都市圏の成長をコーディネートしていく都市を目指して欲しい。

—— 東京大学大学院工学系研究科 教授 家田仁氏



家田 仁(いえだ ひとし)

1955 年生まれ。1978 年東京大学工学部卒。1978 年日本国有鉄道入社。1986 年工学博士。1984 年より東京大学や海外の研究機関での研究・指導を行い、1995 年東京大学工学部教授。現在に至る。

専門は交通、都市、国土に関する計画・政策など。著作や公職は多数。

日本が優位性を失ってきた 25 年

25 年前と言わず、約 10 年前まで、東アジアでは日本がかなり経済優位で、NIES がそれに続くという状況でしたよね。その状況下で日本の経済活力のゲートウェイは九州にあり、その九州の中でも、福岡市は優位性を一定レベル以上発揮してきたと思います。

しかし、そうした時代は終焉を告げ、今後の日本はアジアの一員に過ぎず、“One of Them”という立場で道を歩むことになります。人口は減少を始めましたし、昔に比べてチャレンジ性やバイタリティも低下しているように感じます。

世界の中で、中国は量で勝負、韓国は質で勝負しようとしている現在、日本はどうでしょうか。一部の分野や企業には世界のトップランナーもありますが、全ての面で日本が他より優位ということはありません。例えば高速鉄道の場合、安全・安定輸送という点では日本に優位性がありますが、路線距離、車両数、スピードなどは既に中国が上回っていますし、いずれは安全性も増してくるでしょう。また、自動車の場合、トヨタがトップランナーとはいえ、韓国の現代自動車は既に過去の安いメーカーという

イメージはなく、追いつけがもの凄いですよね。

こういう状況の中、日本は道を歩まないといけなわけですが、私は、これはある意味で戦前の日本の形に戻るようなものだと思います。即ち、戦後、日本の貿易の最大相手国はアメリカになりましたが、それまでは中国が最大相手国でしたし、長い歴史の中で、日本は近隣にある大国と、小さな島国ながら上手に付き合ってきました。そういう姿に戻るとということです。

九州の持つ優位性は個別文化圏と国土の端部

九州の持つ活力の要因は様々あるでしょうが、根本の部分は歴史の中で育まれたカルチャーにあると思います。

つまり、九州は 7 県、さらに昔は雄藩がそれぞれ個別の文化や経済圏を有し、さらにその中で複数の市が個別の文化を有しています。これらは時にコンフリクトしつつも、県、そして九州として、時に協力もする形にありました。このように一枚岩のようでそうではない、多様なカルチャーを内包してきたことが、九州の活力の源泉だと思うのです。

また、九州は地理的に国土の端部だったこと

も有利でした。中国地方は九州のカルチャーと似て、各県個別の文化や経済圏を有しています。しかし、関西と九州に挟まれる中間地域であり、地域活力をどちらかの地域に吸引されがちです。

低迷する都市を支援し都市圏の成長を図ろう

首都圏、中京圏、関西圏、そして北部九州を指す四大都市圏という概念があります。私が小さい頃はこれに似た概念で四大工業地帯というものがありました。これには福岡という地域名は登場しません。また、山陽新幹線の終着駅も博多駅ですから、福岡という地域名は、福岡に詳しくない人にとっては、県の名前として意識するぐらいではないでしょうか。

ここで、興味深いドイツの例をお話します。エッセンやドルトムントがあるルール地方は、20年ほど前までは重工業地域、さらに遡れば炭鉱地域であり、栄えていました。それがエネルギーや産業構造の転換に伴って衰退し、代わって自動車工業を中心とするミュンヘンやシュツットガルトが成長しました。

しかし、ルール地方では近年、昔の産業カルチャーに注目したクリエイティブアーティストたちが地域に集まり、自動車工業に匹敵するまではいきませんが、昔のカルチャーに価値を見出したビジネスが成長しつつあります。こうした一度停滞したことのある都市は、アーティストの活動やインキュベーターの場の賃料も比較的低廉で、それがまた有利に作用します。

北九州市や筑豊地方もルール地方との類似性があり、加えて北九州市の場合は環境政策も頑張っていますから、新たな飛躍が期待できると思っています。

仮にこのように北九州市が盛り返すとすると、今までの福岡市であれば北九州に負けじと何かと頑張ることでしょう。しかし、四大都市圏の一つとして考えると、北九州市よりも優位

にある福岡市が、たとえ一部は譲ってでも北九州市に頑張ってもらい、都市圏全体として成長をしていく策を取る方が、巡り巡って結局は福岡市のためになると私は考えます。

高速交通による一都市勝ちが地域を弱くする

九州でも高速道路や新幹線の整備が進んできました。これは福岡市をはじめとする北部九州の経済拠点性を高めるように作用するでしょう。しかし、今申し上げた各県、各地の独自性で活力を生んできた九州の姿を変えることになるかもしれません。

東北地方では1982年に東北新幹線が開業し、高速道路も徐々に整備が進みました。それ以前は各県が個別の経済圏を持っていたのですが、高速交通体系の整備が進むことで、東北の中で仙台だけが大きくなって、他の都市はセカンダリシティになっていきました。これは仙台にとってはいいことかもしれませんが、東北全体の都市の魅力として見た場合にはどうかと思います。地方中核都市は個別の文化や経済圏を持ち、近隣地域の観光拠点でもありますから、ある都市の一人勝ちの影でこうした都市が廃れていくことは、地域にとって決して良い事ではありません。

海外との流動性向上で脅威にさらされる福岡

ここで目を外に向けると、今後予想されるLCCの成長やビザの自由化などを背景に、特にアジア域内の人の流動性は高まるはず。日本国内でさえ、高速交通の整備の進展でこうした地域の変化が起きたのですから、同様のことがアジアレベルで起きることは間違いないでしょう。

そうした時、日本国内で真っ先にその脅威にさらされるのは、アジアに近い福岡なのです。目と鼻の先に釜山、さらに東京との等距離に上海があるわけですから、独自の経済圏を持って

いた山形が、仙台のセカンダリ経済圏になったように、それら都市の経済圏の下に福岡が入ることになるかもしれません。もちろん、逆に福岡がそれらを傘下にする可能性もありますが。

このような競争を釜山や上海としようとする時に、「福岡」という大きさでは勝負になりません。九州7県プラス山口県ぐらいのエリアで都市圏にならないとダメでしょうね。

多様性があり近隣との境界がない都市圏を

仮に東京が、都心にある千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区の5つの区だけで構成されるとしたら、さぞつまらない都市でしょうね。それらに大田区、江東区、江戸川区といった工業のある区などが加わっているからこそ、東京は東京らしいと言えるのです。

同じことを福岡に当てはめようとする、工業を担う地域が見当たりませんが、その役割を担うのは北九州ではないでしょうか。福岡都市圏の中で全て担おうとせずとも良いのです。

東京と横浜、東京とさいたま、東京と千葉が異なる経済圏、都市圏だと認識する人はまずいないでしょう。敢えて区分しようとするのは行政ぐらいです。これと同じように、福岡と北九州、福岡と筑豊、福岡と唐津などが境界のない同一都市圏として人々に意識され、かつ福岡が覇権主義を唱えるのではなく、それらのコーディネーターになれば、これは素晴らしいことになります。

大学ネットワーク形成と現場教育の重要性

大学でも、九州大学をはじめとして優秀な大学が数多く九州にはあるのですから、それら九州域内の大学ネットワークで、知の総合力を発揮するようになってほしいですね。

大学も地域も同じですが、先程お話したように、個別に独立しつつも、時には連合するという九州のカルチャーを生かせれば、4大都市圏

の中でも最強の都市圏、最強の大学ネットワークになるかもしれません。

また、結局のところ鍵を握るのは若い人です。よく「最近の若者は覇気がない」とか言う人がいて、確かに一部そういう若者もいますが、私はそうは思いません。各自が活躍するフィールドを見つけられれば、実によく頑張ります。

人材育成も大事ですが、内に籠るような教育ではダメですね。例えば、理工系では研究やマネジメントにおける「知的タフネスな場所」に博士を使うのが世界の通例です。しかし、日本では博士課程にある人は長期間大学に在籍するケースが多く、博士の育成率は低いのです。また、企業は「早く博士を世に多く輩出を」と望む一方で雇用は少なく、博士の働き口が結局大学になるケースが多いのも日本の特徴です。

海外では企業で博士が数多く活躍していますから、これから日本企業が海外に進出する際、相手企業側に博士がズラリと並んだら、勝ち目は薄いでしょうね。

東京大学の濱田総長は「タフな東大生をつくる」ことを掲げています。ここで言うタフとは、狭い範囲の専門知識に埋もれず、専門外の分野の勉強をしたり、実地で研究しようとしたりする努力を指します。要は、現場力と言いますか、現場的な勉強が大切ということで、それを磨くチャンスが多いのは、企業活動の現場や、災害活動の現場なのです。今回の大震災後、学生を被災地という現場に連れて行きましたが、彼らはそこで実にいい取り組みをしてくれました。

北部九州都市圏でも、様々な現場で、大学ネットワークが学生を勉強させればよいと私は考えます。先導的な取り組みになるかもしれませんが、そうした取り組みは文部科学省のお膝元ではなかなか始めにくいものでして、国土の端部、九州で始めるのであれば思い切ってやるのではないのでしょうか。

インタビュー日:2011/7/21 文責:URC 白浜